

研究課題	アーレントの科学技術論と「社会的なもの」の概念の関係における理論構成の解明——ベック、ホネットらの社会理論との比較を通じて
報告の概要	<p>近年の ICT、AI、核技術などの科学技術の著しい展開において、それらが社会にもたらす利便性やリスクといった関係を捉えることは急務の一つになっている。これを背景に、本研究課題では、自然および人工物と社会との相互関係から、人間の行為や関係を規定する「社会的なもの」を捉える社会理論として、H・アーレントによるその理論構成を解明すること、そして、U・ベックやN・ルーマンらのリスク論やA・ホネットの「社会的なもの」概念等との比較を通じ、その妥当性をも検証することが目的である。それにあたっての課題は、1. 社会認識のツールたるアーレントの「労働」「仕事」「活動」の行為論や、公・私・社会の領域論が、自然と人工物との関係においていかに展開されているか、そして、2. 過程の概念に着目しながら展開された彼女の科学技術論とリスク論がどのような論理で成立しているか、である。かかる彼女の理論は、EUの技術政策の方針でも参照されているものの、先行研究ではこれらの課題の決着を見ていない。この点で本研究は、アーレントの理論の新たな解釈とともに技術政策への寄与をなす。</p>
報告の概要	<p>設定した研究目的に基づいて行われた研究の結果として、以下のことが得られた。</p> <p>第一に、「社会的なもの」を捉えるための理論的枠組みとして、アーレントの「活動」概念について、社会学史上で行われてきた議論を蒐集したうえで、行為の理念型として再解釈を行った。これにより、「活動」概念が、目的-手段や功利性といった因果連関では把握できないような、社会における新しい過程の「始まり」を認識するための新たなツールとなりうることを明らかにできた。</p> <p>第二に、「社会的なもの」の概念の思想史研究において、この概念の古代における起原となるソキエタス (societas) 概念に関するアーレント思想の解釈を行ったことにより、これまで専ら「社会的なもの」と公共性が対立的に捉えられてきた構図を覆し、同盟関係 (ロック)、関係としての法 (モンテスキュー) というソキエタスが公共性を持ち、これをアーレントが評価していたことを明らかにした。</p> <p>第三に、ICT が社会に与える影響との関連でメディアやモビリティ概念に着目し、SNS など「私的な」時間や空間で行われることが、メディアを通じて公開されることにより「公的に」あからさまにされる問題現象について、アーレントの公私区分の再検討により、その問題が「私的なもの」の縮小からくるものであることを明らかにした。</p>
報告の概要	<p>以上の結果を受けた考察は次のとおりである。</p> <p>ICTなどの新しい技術の導入は、社会に新しい過程の「始まり」をもたらすものであり、例えば、それは、日常生活における公的領域と私的領域の区分を変容させる過程となって現れている。具体的には、SNSの活用は私たちの公私の社会生活を変化させ、その変化は個人の意味では抗いがたい過程のようにして続いている。アーレントが「社会的なもの」の問題を主張するのは、まさにこの過程の不可抗力性にある。したがって、この新しい「始まり」を把握するために彼女の「活動」概念の理念型としての解釈の可能性が出てくる。</p> <p>しかし、「活動」によって、どのように新しい「過程」の「始まり」が接続していくのかについては、まだ明らかにできていない。それは、目的に挙げた、ベックやルーマンらのリスク論との比較を行うことでより鮮明なものにすることができるだろう。今後、この比較研究を課題としたい。</p>

<p><b>研究発表</b> 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p><b>研究成果物</b> テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p><b>【研究発表】</b> 河合恭平「H・アーレントの社会学史上の意義——行為・領域・社会的なもの」日本社会学史学会・関東研究例会，於：日本大学，2018年5月12日。 河合恭平「H・アーレントのソキエタス（societas）概念とアソシエーション論——ロック、モンテスキュー、トクヴィル解釈の検証を通じて」政治と理論研究会，於：法政大学，2018年6月15日。 河合恭平「H・アーレントの全体主義論における孤独の概念——「労働する動物」をテロル執行者にする論理の解明」日本大学社会学会，於：日本大学，2018年7月21日。 河合恭平「H・アーレントの社会学批判と経験の「新しさ」の認識——全体主義論と「活動」論に着目して」第91回日本社会学会大会，於：甲南大学，2018年9月15日。</p> <p><b>【研究成果物】</b> 河合恭平，2019，「H・アーレントの社会学史上の意義——社会学批判と理念型としての「活動」概念」『東京女子大学社会学年報』7: 17-38。 河合恭平，2019，「書評『公共的なもの——アーレントと戦後日本』（権安理 著、作品社、2018年）」『Arendt Platz』4: 57-9。 河合恭平，「社会的なもの」日本アーレント研究会編『アーレント読本』法政大学出版社。（2020年4月刊行予定） 河合恭平，2019，「H. アーレントとモビリティーズ」小川（西秋）葉子・是永論・太田邦史編『モビリティーズ——思想と実践』（仮）丸善出版。（2020年1月刊行予定）</p>
--	--